宇治の大君

――男性拒否の心情について――

高良　瞳

第一章　結婚拒否の倫理

第一節　薫の道心

光源氏の世界では、人間がどのようにして道心に至るかという過程を描き、薫の世界では、「道心あるものがいかに妨げられるか」[1]を描いたものといえると岡崎義恵氏が述べておられる。その薫が、光源氏から受け次いだ道心をたずさえて都から宇治の世界へと方向を転回させるのは、そこに八宮という俗聖がいたからであった。

権勢争いで源氏にしりぞけられた八宮は、栄達を夢みた予期に反し、声望や、外戚関係の世話人などもなくなり、世の転変を恨めしく思い、宮家の俗事から離れ去り、心寂しく宇治の山荘で、大君と中君の二人の娘とともに暮らしている。八宮は現世の思うようにならない倫落のみじめさを克服するために仏道専念を志向するが、娘たちを見捨てるうしろめたさのために出家に踏みきれない。これも前世の因縁だろうと自然に諦めて、身は俗世界にいても、心だけは聖僧になってしまおうというのが八宮の生活態度であった。この八宮に象徴される宇治とは、宿世の了解と宗教的救済への深い関心、そして宿世への抵抗と宗教的救済への低迷という両者の葛藤の中で進行してゆく真剣な世界であった。

薫は柏木と女三宮の過失の中から生まれたが、光源氏の子として育てられ、栄達のためにあくせくする必要もない。ところが自己の出生の秘密をうすうす感じるようになってからの薫は、もし秘密が少しでも世間にもれたら栄達の基礎が危い状態に陥るため、つねに世間の眼を意識している。このような不安定な状態が薫を道心へ導く契機となっていた。

そんな薫が、都から離れた宇治に、大君と中君の二人の女性が、しかも八宮という仏道の師に養育されているのを知り、その美しさを垣間見たのだから、心が動かないはずはない。薫が仏道修業を志向しながら、同時に大君を慕い、弁によって疑問を感じていた出生の秘密が明らかにされていく橋姫の巻は、薫の自己矛盾の始まりであった。が、薫はその矛盾の中で激しく苦悩するタイプではない。

玉上琢弥氏が、「聖のように心をすました気でいる薫が求めるのは、明石の中宮の美の血統か、あるいはその奥にある権力か、世間への見せかけか、そのどちらかであろうか。そのすべてであろうか」[2]と述べておられるような複雑な薫像である。が、明確なことは、仏への帰依が薄れていくことである。このように、薫の主題は、大君への純粋な恋が主導権を握り、現世での道が選ばれてしまったことに注意しなければならない。

光源氏は、愛憎の交錯する世界で生きるうち、自己自身が罪障性において存在することを自覚し、宿世を認めざるをえない立場に追い込まれた。八宮は、貴族社会で自己の置かれた立場から、疎外感を噛み締め、宿世思想の諦念へと自己の生活を導き、宿世を善知識として受け止めようと志向するところで終っている。薫の世界は、光源氏や八宮の世界を前提として展開された。が、薫の出生の秘密ゆえの不安が、具体的現実の中で事実となって彼に迫ってこないために、直接反世俗へとつながらない結果を示した。光源氏においては、自己の罪障の因果応報として、薫の出生事件がとらえられたにもかかわらず、薫においては自罪として自覚的内面化されていないため、宿世思想も不発に終ってしまった。そこに男性の「便宜主義的宿世観」[3]と批判される理由があった。

薫の道心は、人間の存在悪としての罪の意識から、絶対者への帰依と救済へという主題展開につながるべき性格のものであった。それにもかかわらず、作者は、薫を真の仏道修業者としてではなく、暗い宿世を負って苦悩する孤独な人間として、さらに「男」として描こうとした。宗教的救済への関心と願望に導かれてきた薫も、光源氏や八宮の世界を背負って立つのは無理があったようだ。

注1　岡崎義恵氏「光源氏の道心」――『日本文芸学』

2　玉上琢弥氏『源氏物語評釈』第十一巻

3　木船重昭氏『源氏物語の研究』

第二節　大君の結婚拒否

大君がはじめ薫に摩かなった理由は、亡き父八宮の遺言を尊重するあまり、「さばかりのたまひし一言だに違へじ」と強く独身を決意しているためであった。が、大君は八宮が内心では自分と薫が結ばれるのを願っていたことを知っていた。それにもかかわらず、薫を拒否した理由について考えてみると、第一に、妹の中君を薫の妻として、これを人並みにもりたてていきたいという気持が働いているのがわかる。母がわりとして妹の世話をしようという大君の気持は、自己犠牲の精神としてよく取り上げられる。が、大君が薫と結ばれる幸福を中君へ譲る必要があっただろうか。匂宮の中君への愛情は深く激しかったのだから、大君が薫と結婚して、その協力を得

て中君と匂宮の結婚をもりたててい く方がむしろ自然であった。このことは弁の尼が忠告しているとおりである。

第二の理由は、「この人の御様の、なのめにうち紛れたる程ならば」、「うちゆるぶべき心もありぬべきを」という大君の心理に隠されている。即ち、大君の劣等感と同程度の自尊心が、薫に心を許すことに耐えられなかったのだ。明らかに、大君は薫との接触によって、自己を傷つけまいとしている。大君の細い神経は、薫だけでなく他人とのまぎらわしい人間関係に耐えられなかったのだ。

このような大君の拒否の心情を、森岡常夫氏は、「これは薫を深く愛しながらも、結婚による愛の幻滅を避けようというのである[1]」と的確に指摘しておられる。薫の俗物性として、自分が失敗して傷つくことを恐れる小心卑屈を指摘して、愛情に自己を解放しきれぬ人柄がよく上げられるが、大君の場合は、内省的で、慎重な、そして潔白な性格が災いして、結果的には薫と同じように、愛情に自己を解放しきれずに、ただ薫から逃げることのみに心をつくすのである。が、逆にこのような薫との交渉においてこそ、真に大君が自己の内部にあるものを赤裸々に表出する結果になったとはいえないだろうか。薫を避けて身を隠そうとする大君の心理葛藤にこそ、女としての彼女のもう一つの姿があった。

第一の拒否の理由について、野村精一氏[2]や西木忠一氏[3]は、大君の「利己的一面」と指摘しておられる。自分は拒否しながらも、中君に結婚を勧めるという大君の倫理は「錯誤ないし矛盾」に満ちたものであるという訳だ。が結婚拒否を貫くことは、大君にとってもテストコースにすぎなかった。自分の設定した倫理に生きぬこうとした大君に対して、女房たちがあまりにひねくれ者と噂もし、考えもするようなので、大君は独身をとおすべきかどうかと迷う。現実の中で、大君は窮地に陥り、その迷いから、中君まで自己の倫理に従って独身をとおして不幸になってもらいたくないと考えたのではないだろうか。これは自己の倫理を、「非現実的ないし悲情なもの」として覚悟していた姉の妹への思いやりと解釈した方がよいと思われる。そして、もし中君が結婚するなら、自分が理想とする薫を夫にして欲しいと願った。このように大君は自己の倫理の矛盾に気づかずに、中君と薫の結婚を、即ち自分の愛する人間同士の結びつきを願ったのであった。決して大君が自己の結婚拒否を貫くための「自身の窮余の一策」や「中君を犠牲として成り立つプラン」と一面的に決めつけられるものではなかった。

このような大君の拒否の心情を、作者は薫との戦いばかりでなく、社会通念の代弁者として大君の周囲にいる女房たちとの戦いによって際立たせることも忘れてはいない。大君が自己を疎外し、拘束した倫理を貫こうとするほど、弁や侍女たちの策謀や薫の計略

等、外的環境は、危機的なものを孕んで来る。それにつれて大君は、「頼もしき人なくて、世を過ぐす身の心憂きを、ある人どもゝ、よからぬ事何やかやと、次々に、したがひつゝ言ひ出づめるに、心よりほかのこと、有りぬべき世なめり」と考えるようになる。明らかに、結婚問題を契機にして、大君と女房たちの間に対立関係が生じてきた。

大君の女房不信は、大君と中君の寝所に薫が忍び込んだ事件が、女房たちの手引きによるものだということを知ったことに生じている。父の遺言を守ろうとする大君に対して、女房たちはこのような後見人のない現在「『故宮の御遺言たがへじ』と、おぼし召すかたはことわりなれど、それはさるべき人のおはせず、品程ならぬ事やおはしまさむと、おぼしていましめ聞えさせ給ふ」といい、さらに「おぼしおきつるやうに、おこなひの本意を遂げ給ふとも、さりとて、雲・霞をやは」と大君に薫との結婚を極力ことばをつくして勧めている。このように、女房たちは大君に対して世間に従い結婚するようにと強調する。大君が困惑するのを知りながら、「今おのずから、見たてまつり馴れ給ひなば、思ひ聞え給ひてん」と通俗的に判断して、薫を導きいれている。

篠原昭二氏はこのような女房たちについて「世に従うという処世訓により生き、かつ姫君もそのように導こうとする女房たちは、もはや世に従う発想しか持ちえないのであった」[4]と述べておられる。さらに、「女房には姫君の教育という職分があり、それは、姫君は世間並みの女性、いいかえれば当時の貴族社会の求める女性の型にはめ込むという思想にもとづいて果された。この大君物語に於ても女房はそのような職分と思想を持つ者として登場する」と論述されているのは、おおいに参考になる。このように女房たちからも孤絶した大君が頼れるものは、自己の倫理だけであり、このことが彼女の倫理を観念的なものにしてしまったのである。

これまで、大君の拒否の理由について述べてきたが、次に、大君が殉じた八宮の遺言の内含する問題に触れておきたい。

八宮が大君たち姉妹に残した遺言は、不信と疑惑に満ちた貴族社会の人間関係からの意識的な離脱と政治的世界への拒否等、八宮の体験による結論としての忠告ではなく、一夫多妻制下の男女の愛情生活のあり方についてであった。大君が八宮の遺言から学んだことが男女の結婚生活のあり方のみであったことを指摘して、野村精一氏は[5]大君の「貴族社交圏の実体についての無知」であり、「現実に対する認識不足」であると述べておられる。が、このように即断してよいものかどうか疑問に思う。大君の人物像だけを捕えて云々するのではなく、八宮の遺言自体がすでにそのような問題を孕んでいたと考えるのが妥当であろう。

この遺言の問題に関して、松田咏子氏[6]は八宮が貴族社会の人間関係や政治に背を向けた根底にさえ、「余所のもどき負はざらなむよかるべき」という世俗的な処世意識がはたらいていたことを指摘しておられる。それゆえに大君が女性として当時の社会で生きてゆくに際して世間の物笑いの種にならないためにはどうすればよいかという問題にのみ終始する結果になってしまった。第二の拒否の理由として考えられた薫からの逃避でさえ、彼女の自信のなさと自意識の強さが大きく作用していながら、薫の愛が冷めて、世間の物笑いの種になっては父の遺言に背くから薫を拒否するという論理にすり替えられてしまう。

大君が女房たちに気を許そうとせず、頑固に結婚拒否を貫くことによって、世間一般の倫理を際立たせる結果になったにもかかわらず、大君が自己の倫理の中核に置いた八宮の遺言そのものが、すでに世俗的なものを内包していたために、彼女の拒否は世間を恐れる発想の域を出ることができなかった。薫を拒否することが、親の面目をつぶして罪を得たくないために求められた態度であったにもかかわらず、それはまた自己を隔離して自尊心を守るだけでなく、世間の評判に対する恐れからの逃避でもあった。「人間のあり方として、既成のモラルの存する社会の中に、その社会を肯定的に生きようとするところから、世間の評判を恐れる心が生れる。（中略）既成のモラルの中におかれた自己を肯定的に生かすためには、すべての現象を宿世と観ずる思考法が準備されている。[7]」といわれるように、大君も既成のモラルを打破することはできなかったが、宿世思想に埋没するのではなく、強い「心掟て」で身を守ることによって宿世を逆手にとることになり、男性の保護による以外に生きる道のなかった当時の女性の置かれた立場を明らかにして、人形的存在から精一杯に生きる工夫を追求して止まない女性へと転化した。

大君の結婚拒否の倫理は、事態が深化するにつれて、女房たちの倫理によって代弁される現実の前に崩れてしまいそうな危機を孕んで、彼女を苦しめるが、そうであればあるほど彼女は孤絶した自己の倫理に固執し、これに殉じていく決意を固める。自己の倫理が「非現実的ないし悲情なもの」と承知しており、自己の敗北が自明のことと覚悟が決まっている大君の生き方であるからこそ、自己の倫理に殉じていく過程が、真実で真剣なものとしてわたしたちに迫ってくる。

すなわち人物論として大君の性格を展開するとき、「錯誤ないし矛盾」に満ちた大君像ということになるが、作者の側に立ってみるとき、これこそ作者の求めた大君の人間像であったと考えられる。それだからこそ大君像を追求するときに、作者紫式部の真剣な呼吸のようなものが重なり合って感じられるのだろう。諸先学がこのよ

うな大君の主張を「主体性の強さ」ないし「かたくな」な面と感じたのは無理ないが、それよりもむしろ、作者の譲ることのない一点の主張として、大君の結婚拒否の貫徹を受けとるべきだろう。

注1　森岡常夫氏「宇治の大君論」―『文芸研究』

2　野村精一氏「源氏物語の問題―宇治十帖の人間儀―」―『国語と国文学』昭和三十四年四月注

3　西木忠一氏「大君の死をめぐって」―関西大学『国文学』第三十七号

4　篠原昭二氏「大君の周辺―源氏物語女房論―」―『国語と国文学』昭和四十年九月

5　野村精一氏前掲論文

6　松田咏子氏「宇治の大君をめぐって」―『北海道大学国語国文研究』昭和四十三年六月注

7　山本利達氏「拒否の心情―源氏物語の女性について―」―『国語国文』昭和四十四年二月

第三節　大君の死の持つ意義

大君の結婚拒否の倫理は、中君と匂宮との結婚生活をとおして、ますます固まっていった。彼女は結婚に対する不信感から、現実に絶望して生きる意欲を失い、死を願うようになる。が、彼女の死は、往生を頼りにしたものではなく、現在の自己の生に対する否定的契機となっている。彼女が死を願ったのは、薫との結婚を避けようとする気持からであった。即ち、大君は「愛の逃避の方便として死や出家」[1]を考えていた。

こんな病中の看護も、わたしでなければ誰がいたしましょうと、つきっきりで看病し、修法なども指示する薫に対して、大君の心は和んでゆき、薫の看護を受けるような宿縁だったのだろうと、薫の接近を許してしまう。落ちついた薫を見るにつけ、匂宮と比べられて、有難いと自然に思われるのであった。このように、大君が病床にあって、薫を強く拒否しなかったのは、自分が死んでのちの薫の思い出に、強情で思いやりのない女と思われたくないためであった。総角巻での薫は理想的な求婚者であり、それにも屈せずに死の瞬間まで自分の倫理を守り続けた大君は、心高い女性として印象深く描かれている。死を前にした二人の愛は浄化され、犯しがたい気高さゆえに大君亡きあと、薫は形代を追求するようになる。が、大君の側に立って死を見ると、別離の哀愁を越えて、死そのものが誠実な愛の証とさえなっている。

大君の死は、薫との愛を「永遠化する」ためであったというのが、諸先学の説くところである。愛する薫に対してさえ、頑固に拒否の姿勢を貫徹した大君の死について、西木忠一氏は、「せめて息

の終る瞬間に、薫と大君との心の結びつきを与えようとする作者の努力がみられ、ここに二人の救われるすべがあった[2]」と述べておられる。死の間隙の薫との交渉を美しく描くことにより、大君は結婚によらざる恋愛の永遠化を心に思い描くことのできた女性として形象されたかのように思われてならない。が、それと同時に、西木氏のおっしゃるように、はたして大君と薫は救われたであろうか、という疑問が生じてくるのも否定できない。とはいえ、大君の恋愛の永遠化という抽象的観念的発想は、それのみに終ることなく、当代藤原貴族社会の現実批判たりえたという事実もみのがせない。

仲田庸幸氏は、源氏物語の死相の美についての詳細な研究の中で、「源氏物語の死相の美は、観相の世界における極楽往生に、女性の最後の優位を示したもの[3]」と述べておられる。即ち、死によって、王朝女性が依存者の苦悩から解放された瞬間に、浄土光明の極楽を観相させるかのような美を描写することによって、「一夫多妻のもとに、非人間的な桎梏と玩弄化に苦悩した」女性に、「最後には死相の美において浄土に迎えられ、多くの人々に、就中男性に心から哀惜せしめる構想において、彼女のレジスタントぶりを示したもの」と論述しておられる。確かに、大君の死の持つ意味は大きい。大君が結婚を拒否してきた理由を振り返ってみると、㈠後見人がなく、権勢実力の一切を欠く。㈡愛情の永遠性を慕い肉体的な関係を避けた。㈢自己の年齢や容色の衰えに不安を感じている。㈣父の遺訓に忠実すぎた。㈤男性一般への不信感を持っていた。㈥王朝貴族社会への参加に不安を抱いている。これらの点からみてもわかるように、大君は依存的自己の立場がもたらす不安や苦悩から逃れるために死を願ったと考えられるのである。

大君の死相は、「隠し給ふ顔も、ただ寝給へるやうにて、変はり給へる所もなく、うつくしげにて、うち臥し給へるを」とか、「今はのことゞもするに、御髪をかきやるに、さと、うち匂ひたる、たゞ、有りしながらの匂に、なつかしう香ばしきも、ありがだう」と描写されている。そんな美しい大君の死相を見るにつけ、薫の恋慕はつのるばかりで、大君が本当にわたしをこの世から厭離させる手引きであるならば、せめて遺骸の上にどんな欠点でもみつけさせて下さいと仏に祈らずにはいられない薫であった。作者によって、大君の死は「最後の優位」を与えられ、浄化される。が、反面薫は大君思慕の永遠性ゆえに中君から浮舟へと変転する。薫の変転はついに最後までとどまることを知らず、空しく「ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへも知らず消えし蜻蛉」とつぶやくところに薫の深い悲劇性を生じさせている。小野村洋子氏[4]は、薫が道心を失い、大君や浮舟を失っていくことは、菩提心を起させるための仏の善功方便であると解釈しておられる。が、そうなると、光源氏の世

界のむしかえしにすぎず、何ら新しい問題の提起にはならなかったのではないだろうか。

薫は大君の拒否を「心えがたく思」いそれを追求する契機として形代を求めた。そんな薫の恋慕ゆえに、大君に続く中君や浮舟も、薫を慕いながら拒否の態度に出る。中君や浮舟の拒否の根本的な理由もまた、先の大君の例にみられるような、一夫多妻制下で非人間的な桎梏と玩弄化に苦悩した依存者が、不安からの解放を強く希求したところにあった。反世俗を願っていたはずの薫は、世俗の栄華、栄進の中でしか女性を愛すことができなかった。薫が出家して、法の友として彼女たちをもてなすことを一度も考えていないことから、薫が世俗の男女関係以外の方法を思いつかないことがわかる。このあたりに薫が通俗的な男性として写る理由がありそうだ。道心堅固なわたしですから、世間並の好色な筋として無視なさるなと大君に接近した薫が、肉体関係によって大君の心を得ようとした。それは結婚という形式に等しく、大君を依存者の立場に落とすことであった。

作者はそんな薫を、「男というもの、心憂かりける事よ」とか、「心ぎたなき聖心なり」と冷たいことばで突き放してしまうことがしばしばである。秋山虔氏が、「男が女の宿命的な受難の痛みに関与することができぬということは、かれがいかに理想化されようとも加害者であることを免れぬということになるのだろうか。[5]」と疑問形にしたのも無理ないと思えるような作者の眼がある。このような「男性に心から哀惜せしめる構想」によって、作者は当時の貴族社会の一夫多妻という婚姻制度を痛烈に批判する結果になった。

八宮でさえ、女性は「もてあそびのつまにしつべき」といい、女性は権勢争いの道具としてのみ尊重され、男性が女性への愛のために身を滅ぼすことになれば、「人の心を動かすくさはひ」として「罪ふかきもの」と、女性を規定する。このような男性のエゴがまかり通る藤原摂関貴族社会の一夫多妻制度が原因となって派生した女性の問題を、宿世という超現実的な力として認識しようとしたところに、「当代の観念の欺瞞[6]」が潜んでいた。

光源氏や登場する男性たちの多くが理想とした女性の性格は、寛大で物静かな女性であった。このような理想の女性になろうとしながら、自己抑制的他律的な女性になりきれない苦悩や葛藤が、第二部の紫上の悲劇に象徴されている。紫上が理想的な女性として身を処していけばいくほど、その悲劇性が際立って来たように、男性の愛だけが自己の存在証明であった当時の女性たちにとって、このような男性からみた理想像に自己をあてはめようとして、自己分裂に陥る苦悩は避けられなかったであろう。この苦悩を回避するために宿世という超現実的な観念を導入して、表面的な諦めの境地に解消

しようとしたすり替えの構造があった。それにもかかわらず、「宿世の因縁は前世の因果関係だけではなく、必然的に来世にも及ぶ」[7]ものである以上、現世での女性の悲哀は、来世をも予知させ、ますます絶望的なものとして、自己の宿世を認識せざるを得なかっただろう。

大君は宿世について、「此の、のたまふ宿世といふらんかたは、目にも見えぬ事にて、いかにも〳〵、思ひたどられず」と規定している。松田咏子氏は、拒否の態度を貫徹する大君の強さが、このような宿世という認識の上にあったことを指摘して、「それは（宿世は）思い辿られぬ偉大なものであると共に、捉えどころのないものとして、それに支配されながらも、又、それをしっかり観ていこうとする態度であった」[8]として、大君の特異な宿世観が、「作者の人生解釈の一つのあらわれ」であると述べておられる。大君が「宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば」といったのは、女が夫を持つのは宿命であるとして、女であるわたしが、自己の身を、結婚して不幸になりたくないと思う自分の心のままにもてなすことができない世の中であることよ、という意味が言外に含まれていた。これは作者の「身と心」という把握の二元性を考慮に入れて考えなければならないだろう。「身」とは外部から規定されたものであり、前世からの宿世である。が、心は自己のものであり、自分の意志で変化させる可能性を持っている。それにもかかわらず、振り返ってみると、自己の心は身のために流されている。身に流されがちな心に没入するのではなく、そんな自己の状態を反省し、「身と心」の分裂という人生の不条理に対峙していく可能性を探るにはどうしたらよいのかという反問がつねに作者の中にあった。紫上の結婚不信を継承した大君の拒否であったが、彼女は最後まで独身をとおすべきかどうか悩み、心が身に流されがちなのを痛感した。が、頑強に結婚を拒否することによって、女性の人間らしい生き方を追求する可能性を打ち立て、又、作者は大君を死に追いやることによって、大君の心を貫徹させた。すなわち、作者は大君の一回かぎりの厳しいまでに美しい死をとおして、強引に身と心の対決を迫まり、体験したとはいえないだろうか。

とはいえ、大君の結婚拒否は、宿世の超克として提起されたにもかかわらず、極端ないい方をすれば、結果的には宿世からの逃避にすぎなかったという批判も逃れられない。

注1　森岡常夫氏前掲論文

2　西木忠一氏前掲論文注

3　仲田庸幸氏『源氏物語の文芸的研究』

4　小野村洋子氏『源氏物語の精神的基底』

5　秋山虔氏『源氏物語』岩波新書

6　木船重昭氏『源氏物語の研究』
7　広川勝美氏「『紫式部日記』の方法と浄土教思想試論」―同志社国文学」第四号
8　松田咏子氏前掲論文

第二章　大君と浮舟の出家志向

大君の出家の理由は、これまでみてきた結婚拒否と同一のものである。即ち、貴族社会における男女関係からの離脱として、結婚拒否の維持が困難になってきたとき、それに代る手段として出家を考えている。

匂宮と薫と、二人の男性に愛された浮舟が、わが身ながらどうすることもできずに、二人の間を漂って決断できなくなってくると、作者は浮舟を入水させてしまう。が、それでは飽き足らず、再生によって決然とした拒否の態度を示し得る女性として再登場させた。浮舟は出家し、横川僧都の導きを支えとして新生を試みている。この浮舟の出家を、大君の出家志向と比較しながら考えてみたい。

これまで、浮舟は横川僧都に救いとられるというのが定説となっている。ところが横川僧都の思想という問いになると、彼が浮舟にあてた消息文の解釈の仕方によって、三つの説に分かれてしまう。第一の説としては、還俗勧奨説がある。この立場には、吉沢義則氏[1]や岡崎義恵氏[2]、丸山キヨ子氏[3]、高橋和夫氏[4]、玉上琢弥氏[5]などの説がある。第二の説は、仏導精進を勧めているのだという説であり、村田昇氏[6]や門前真一氏[7]がこの立場をとっておられる。第三の説は多屋頼俊氏[8]によって主張されたもので、先の両説の間にあって、還俗説を否定し、しかも二人の交渉を勧めている。この説と同じような立場で、広川勝美氏[9]や佐山済氏[10]が述べておられるが、二人の交渉を、精神的交渉として勧めているのだと強調しておられる点が特徴となっている。

さて、横川僧都の消息文であるが、これをみると、僧都が薫に対するあわれみと、浮舟に対するあわれみとの撞着に葛藤しているのがよくわかる。僧都は薫と浮舟に責任を感じて惑い、その解決として浮舟に薫のもとへ帰ることを勧めたというのが還俗説の立場である。この説に従うと、僧都の思想は、宿世のうちに生きることに人間の真に生きるべき道がある、ということになるだろう。宿世の支配する現実世界を宗教的世界へ転回することによって、仏の導きを受けるという救済の論理である。この場合、浮舟を薫のもとへ帰すことで、薫の愛執の罪をはらし、浮舟へは、出家したという自己の行為の功徳を頼りにして、今後の心の安住を得るようにと勧めている。ここに至っては、精進努力にではなく「頼む」という他力や在俗の勧めに近い。しかし、これは自己の精進功徳を手がかりとする

ことによって、救済の手がかりを人間の側におくことになり、人間の煩悩が再び人間を縛るという矛盾を孕んでいた。

それでは、仏道精進の方向には救済はあるだろうか。この場合の救済の可能性は、浮舟の内部における真の宗教的転回が条件となっている。この仏道精進説に立つとき、「浮舟は現実に失望しはてて願生浄土へと転化してゆく」[11]ということがいえる。が、これはあくまで、条件つきであることを忘れてはならない。

これまでの二つの説、そして多屋氏の説に示されるような態度を浮舟は物語世界でとることなく終っている。浮舟の救済という問題は物語の現実へ具現されていない。ここでいえることは、横川僧都のことばでさえ、浮舟にとっては自己の殻に閉じこもる契機にしかならなかったということである。作者は、横川僧都と浮舟の無言の対立の中に、宗教的救済の理念と、現実に具現された女性の救済のむつかしさを頑固に示した。そこにこそ、作者が大君から浮舟へと執拗に展開してきた男性拒否のテーマが生きてくる。横川僧都は救済の論理を述べる役ではあったが、浮舟が救われることは前提としてあったわけではない。このような浮舟の態度をみていると、横川僧都の矛盾を、現実の愛憎にもまれた女の直観で感じていたのだろうかと思えてくる。

大君や浮舟が訴えた問題は、一夫多妻制下の女性の苦悩であり、それを理解できない薫や匂宮である以上、彼女らの救済はない。横川僧都のことばを還俗勧奨とするにしても、現実世界内で宿世と対峙して生きるにはあまりにも弱い女性であり、ひたすら「頼む」というには、問題の根本的な原因がみえすぎる作者ではなかっただろうか。非還俗の立場でみても、浮舟の出家が遁世であり、菩提追求のための精進の決意が彼女の中にみられないかぎり、救済は現実問題として不確かとしかいいようがない。

原始仏教に、「自己を護り正念を持せば、比丘よ汝は安楽に住せん」[12]とか、「自己を防護せよ、瞬時も（空）を過せしむることなかれ」[13]と教えているのは、諸々の煩悩や汚れが己にまつわりつかないように気づかうことであると考えられる。大君の出家も、悟りの境地とか、往生を願うとかいうのではなくて、内面的あるいは外面的な破滅からの自己防護として出家したと考えるべきだろう。

原始仏教でいう出家とは、身心遠離して、心を乱すものから自己を防護して、安楽な生を得ようと志向したものであった。が、大君や浮舟の出家は主として男性からの逃避にあったことに注意したい。これまでは藤原貴族社会からの自己疎外の悲願という側面にのみ目が向けられてきたが、大君の出家には、薫からの逃避という側面が特徴となっている。

これまで、浮舟の新生が横川僧都を支えとして発足したものであ

り、作者が宇治十帖の終局において人間性の全体を解放する道程を横川僧都の思想の中に見出そうとしたと論述されながらも、現世での愛にも、後世へつながる仏道修業にも真の人間としての救済を求めない人物として作者が浮舟を設定したのはなにを意味するのだろうか。作者が物語世界の終局を横川僧都の説く仏教思想の中に帰着させなかったからといって、作者の挫折に終ったとは即断できない。むしろ問題は、作者によって歩まされる浮舟が自己防衛という個人的倫理に固執して、物語に構築された世界を生きぬこうとしている姿勢にあるのではないだろうか。

浮舟の出家も、大君の出家志向と同じように、男女関係からの離脱として実行された。浮舟にとっては、薫や中将君ばかりでなく、肉身の小君とさえ対面しようとしない態度だけが、彼女の自己防衛の最後の手段だったのである。生身の人間的な煩悩に苦しみ、ぎりぎり一線のところで自己を疎外し、自己を防護している浮舟に至ってはじめて、作者の主題追求とその方法は、より現実的な人間の葛藤として転移された。

とはいえ、浮舟が死から出家へと突き進むのは、二者択一を決しかねた浮舟が、われとわが罪を負ってゆく「自己否定」とはとらえがたい。浮舟の罪の意識は、本文から明確に指摘することはできない。むしろ浮舟は、「わが心にてもありそめし事ならねども、心憂き宿世かな」、「うたて心憂の身や」というように、自己の存在を主体的に把握するのではなく、宿世や身の上というような超越的な時間の観念に押し流されて生きる受動的な女性であった。このような浮舟像からは、入水という事実も、「めざめた理性の背徳を自責した」結果とは補え難い。そんな浮舟の性格であったからこそ作者は入水によって浮舟を再生させる必要があったのだ。大君の問題でも言及したように、浮舟像と作者主体の問題意識を混同したところに、このような浮舟像の出現があった。このことを明確にするためにも、あえて自己防衛ということばを使用した。

大君が薫を恋慕しながらも結婚拒否を貫徹することについては、作者の譲ることのない一点の強力な主張として意義づけておいた。が、大君が生きている間は、薫を拒否できない女性であったことを忘れてはならない。人間関係の愛憎の中でもまれて受動的に生きるうちに、いやおうなく結婚拒否へと追いつめられ、さらに投身を経て出家という行為に至る経過さえ、作者によってしくまれた状況に追いつめられた形であった。というのも、浮舟が求道者にまで追いつめられながら、薫の面影を消すことのできない人物だったからである。ここでも大君造型で犯したような結果を露呈している。

大君や浮舟は、作者の設定した結婚拒否という大前提と、具体的物語世界の状況とのはさみうちの中で、自己防衛という方法をみつ

け出した。彼女たちのかたくなな拒否の姿勢は、彼女たちの内面とは反対に、鋭く、冷たい作者の眼から逃げ、主体的行為者となるための、ぎりぎりの方法であっただろう。（ここでいう主体的行為者とは、自己の判断や決意によらずに男に靡かない古物語の女主人公たちとは違って、自己の自尊心や羞恥心を意識して、面目を守ろうとする自己の判断や決意をもって拒否しているという範囲内でのことである。）ここに、自己の造型した人物が自分の思うとおりにならず、予期せぬ人生をくり広げて行く作品の自立があった。が、作者は登場人物たちの思いのままに行動させようとはしない。秋山虔氏は、「とりもなおさず、作者の中のこうした浮舟の歩みに対する本能的な抵抗がにじみ出ているということでもあるだろう」[14]と、作者が浮舟や大君の内面を無視して悲劇的な運命に追いたてていく造型方法を評価しておられる。

浮舟の出家志向は、「かきくらし晴れせぬ嶺の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや」、「尼になし給ひてよ。さてのみなむ生くやうもあるべき」という彼女のことばでもわかるように、現世を拒否しながらも、現世で生きるための救済であった。大君でさえ浄土を欣求する方向へは向いていなかった。この限りにおいては、彼女らの道心は「貴族社会の矛盾に原因する悲哀からの脱脚を主たる意図としていた[15]」と考えるべきだろう。大君や浮舟の出家は、現実社会で主体的に生を追求することのできなかった女性の満たされない心を反映しながら、宗教的思想に支えられた諦念を導くにはいたらなかった。が、貴族たちが求めたような浄土、「此岸の理想的形態を彼岸に投射させることにより現実世界内に擬想的に構出せられた浄土の幻影[16]」に陶酔するような道心でもなかった。貴族社会に浄土の幻影を構築することは、貴族社会の現実に絶望した彼女たちには不可能なことであった。それにもかかわらず、人間性をまったく否定することもできない彼女たちは、憂鬱なわが身を隔離することによってしか自己の生を追求することができなかった。

大君の結婚拒否の倫理を引き次ぐものとして、浮舟の現世拒否の倫理を提起したが、それは現世をまったく否定したものではなく、現実世界内において生きるための新しい世界の構築を希求するものであった。大君と浮舟の現実世界内で生きるための新しい方法を、自己防衛の姿勢として確認してきた。本来それは、貴族社会内で女性として生き、あるべき人間性を追求し、確立する方向に向かって展開されるべきものであったにもかかわらず、空蟬や朝顔、六条御息所、明石上の拒否や紫上の愛への不信をとおして、女性の不幸を通過してきたあと、大君は死によって、浮舟は草深い横川に身を隠すことによってのみ可能となったことに注意する必要がある。

「宿世」思想の追求によって罪障性という問題を引き出してきた

作者は、そのテーマを光源氏から柏木、そして薫へと展開したが、薫において自罪の意識がないために不発におわった問題を、浮舟へと継承することによって出家という形に導いた。しかし、浮舟の場合は、自分のおかした罪障を宿世に照して深く反省するのではなく、現実世界内で愛憎にもまれるうちに、自己の罪深く憂き身であることの自覚に達し、「悪の心」として自己の内面に向けるようになる。ここに至って、「宿世」を自己の罪障性から切り離すことになったといえないだろうか。一方、「宿世」に苦しめられた女性の愛の形を追求することによって生み出した現世離脱的な愛を実現するために、紫上から大君へと展開する中で、「死」を試みた。さらに死を超えて出家という形を浮舟によって実現した。大君の死は生よりも積極的な意味を持つものであったが、浮舟の出家は一種の死であった。

今井源衛氏が、「宇治十帖の末尾は、いちはやく中世隠者の文学を予兆している」[17]と指摘しておられるのは、浮舟が現世執着への迷いを絶ち切れないまま、出家という形で自己防衛の姿勢をとったことをさしているのだろう。しかし、彼女たちが貴族社会から自己を疎外しようとする姿勢の中には、不遇への不平や不満が自己の宿世のつたなさに解消されてしまい、呪ったり反撥する態度はみられない。貴族社会を批判し否定する世界観や、その実践としての隠遁の予兆ではなかった。宇治十帖の世界は、「それ（救済への転回）へまで」[18]を描いたものであるといわれているが、むしろ女性のおかれた超えがたい現実を描くことに本領があったのではなかろうか。

浮舟形象に至って、罪障性から宿世を遠ざけるまでに発展した作者の問題追求であったが、その結果として、浮舟を出家に導いてゆく物語の帰結から、逆に作者の認識の核心に迫らなければならない。自分が現世に身を置くかぎり、薫や匂宮の愛執を晴らすことのできない罪深い身であることを自覚した浮舟によって、阿弥陀仏は罪障から自己を救いとるべきものとして求められてはいなかった。作者は、阿弥陀仏の救済ではなく、孤独な出家生活へ追いやることで、浮舟の罪障を裁いたと考えられる。

注1　吉沢義則氏『対校源氏物語新釈』

2　岡崎義恵氏「源氏物語の宗教的精神」―『日本学士院紀要』第二十三巻第三号

3　丸山キヨ子氏「源氏物語における仏教的要素（その一）横川の僧都について」―『東京女子大学日本文学』第二十一号

4　高橋和夫氏『源氏物語の主題と構想』

5　玉上琢弥氏『源氏物語評釈』

6　村田昇氏『日本古典の仏教的精神』

7　門前真一氏『源氏物語新見』

8　多屋頼俊氏「浮舟と横川僧都」―『文学』昭和四十三年十一月
9　広川勝美氏「浮舟の救い―その課題と横川僧都の役割―」―『日本文学』昭和三十九年三月
10　佐山済氏「浮舟の造型と位相」―『国文学』昭和三十九年五月
11　広川勝美氏前掲論文
12　Dhammapada p. 379.
13　Thera-gāthā p. 1005.
14　秋山虔氏―「浮舟をめぐっての試論」―『源氏物語の世界』
15　広川勝美氏『紫式部日記』の方法と浄土教思想試論」
16　家永三郎氏『上代仏教思想史研究』
17　今井源衛氏『紫式部』
18　小野村洋子氏前掲論文

結びにかえて

秋山氏が「実人生に生きることに絶望した紫式部にとっては、わが生命の移転として生きる虚構の世界も、やはり生きられぬ世界であることが証されることになった」[1]と述べておられ、モーリス・ブランショも「作品とは、彼を、（中略）芸術が何ら依存するところなき、無力な人間にする決定そのものだ」[2]と書いている。が、宇治十帖の主題展開の方向性から、敗北は自明のことだったのではないだろうか。それでも、なおかつ、結婚拒否から、現世拒否への主題展開を顕示し、強力に貫きとおすことに彼女の本領があったのではないかという印象を強く受ける。あえて血まみれの現実世界において、自らのなめた歴史的核心をとらえ、それを物語の中に表現しようと欲した。が、出家という形をとることによって、たどられる結果はすでにわかっていながら、あえて出家をさせた作者の問題として、女性の弱さを見逃し、じゅうぶん糾明しなかったという非難は逃れられない。

第二部の世界までは、作者が自分の顔を出さない物語の世界であった。が、宇治十帖の世界の人物像造型の方法をみると、意図した問題と、物語世界の低迷との間で、のたうちまわっている作者のあせりのようなものが感じられてならない。

注1　秋山虔氏『源氏物語』岩波新書
2　モーリス・ブランショ『文学空間』